

鄧氏「時間との闘い」

中嶋東外大教授 中国情勢で講演

中日懇話会

第百九十六回中日懇話会(中日新聞本社主宰)が十二日、名古屋市西区のホテルナゴヤキャッスルで開かれ、東京外語大教授の中嶋嶺雄氏が「中国情勢を読む」と題し、約四百人の会員を前に講演した。中嶋氏は「中国の政治情勢は表面的には改革派がもてはやされているが、連合体としての保守派の抵抗も強い。改

革路線が定着するかどうかは最高実力者・鄧小平氏の「時間との闘い」でもあると分析。「中国では鄧氏を中心とする革命第一世代の総退場の時期が迫っており、それは、世界の共產党体制の崩壊という歴史の潮流と一致するかもしれない。中国革命の大団円が迫っているともいえる」との見通しを示した。

講演要旨は次の通り。

【鄧小平氏】現在の中国は、ことし一月から二月にかけての鄧氏の南方視察での改革・開放推進指示を軸に動いている。しかし、今、なぜ引退した鄧氏が自ら地方で旗を振らねないのか。それは、鄧氏が北京でも足も出ない状態にあるからだ。故毛沢東氏が上海で文化大革命ののろしを上げた当時の政治形態



中日懇話会で講演する中嶋東京外語大教授(名古屋市西区のホテルで)

とよく似ている。当時は左が右をたたき、今回は右が左をたたき。さらに、改革派の人材不足もある。鄧氏を支える上海の指導者グループは中央では地位が低い。江沢民総書記は就任して三年たつて

らに受けざるを得なくなる。深圳などの経済特区や広東省の発展は香港なしでは考えられない。香港が中国を変える。経済規模はある意味で中国より台湾の方が大きく、貿易総額は中国の千三百億米ドルに対し台湾は千四百億米ドル。最近、台湾から香港への貿易が急増、その大部分が再輸出として中国へ流れている。こうした香港、台湾の影響・「南の風」が一層中国に伝わる。政治、軍事の時代から経済の時代になった今、中国、台湾、香港の三つの中国社会をバランスをとって考えるのが日本外交の課題だ。